

[日東駒専合格英語全文訳]

第 1 回

初期のころの手職人つまり典型的な労働者は自分のやっている仕事に確かに満足していました。彼の努力はたいがい自分自身の利益に結び付いていました。彼は、作り出した完成品の中の制作物に成果を見ました。更に言えば、この品物を作ることは、しばしば融通性、あるいは克服するためには成果に打ち勝つための創意工夫力が必要でした。本当の意味で手職人は自分の労働によって教えられるとといいます。

今日ではすべての事情は変わっています。例えば、2, 3人ぐらいの男たちですべての仕事をやっている森の小さなかじ屋さんの代わりに、それぞれの人が全工程のほんのとても小さな一部分に従事している鉄鋼所があります。彼はしばしば始めから終わりまでについて知りません。そして、発見することの興味を起こしません。彼の唯一の刺激は、週末にある決まった給料を受ける権利があるということです。しばしば、その仕事の性質はいやなものですよ。労働条件はつらいです。それゆえに、その世界は仕事という観点から眺めて見ると、興味もなく無意味な場所です。

もちろん、仕事の性質と労働者の態度との密接な関係はないと主張されるでしょう。それが言われなければならない唯一の本当の関心事は、週給の量です。もし週給の量が安心を作り出すようであれば、そのときはすべて申し分ないだろう。誰もが満足し、心理的あるいはそれ以外の危険なしに経験します。しかし、経験によってたとえ賃金を犠牲にしても、労働者は無意味だと分かっている仕事に反抗することを示します。(日本大ー経済)

第 2 回

テレビというのは、そんなにも長くは我々と一緒にいませんでした。しかし、我々は既に、テレビがなかったころ世界はどのようであったかを忘れ始めています。我々の家庭に、どうぞおあがんなさいよ、とって一つ目小僧の化け物を受け入れる前に、我々は決して、余暇をつぶすのに難しいと思うことはありませんでした。我々は、テレビなんかよりも、上品な趣味を楽しむことはよくしていま

した。例えば、我々は趣味をもつのが普通でした。我々は友達を呼んでもてなし、彼らにもてなされたりもしました。劇場や映画やレストランやスポーツ・イベントなど、楽しみを求めて出て行ったものでした。読書さえ良くしたものでした。音楽を聴き、時たまラジオで放送されたお話しに耳を傾けていたものでした。今述べたすべてのものは過去のものでした。今や我々のすべての自由時間は、『目玉ぎょろぎょろ箱』すなわちテレビによって支配されます。我々は家へ走って帰ります。あれだのこれだのと番組に間に合うためには、食事をかまわずに飲み込めます。食卓に座りかつ、ゆっくりと一家だんらんをしてその日の出来事をつたえ交換したりして夕食を食べることは、とっくにあきらめてしまいました。サンドイッチや一杯のビールで間に合わせています。もし夕食が番組を見る妨げにならないなら、何でもよいのです。化け物は絶対的な沈黙と注目を要求し手に入れます。もし家族の誰かが思い切ったある番組中に声を出すと、急いで黙らせてしまいます。

世代全体は今や成長しています。食事は食べられないで放置され、宿題がなされないまま放置されて、睡眠不足になります。テレビというものは何から何まで静かにさせてしまいます。今ではお母さんが、居間に赤ちゃんに押し込めて、テレビにスイッチを入れることによって、子供達を静かにさせておくことは、どこへ行っても行われることです。子供達がださいコマーシャルを見ようが、暴力劇を見ようが、子供達が静かにありさえすれば、問題になりません。

世界中で得られる創造性のある才能の分業には限界があります。毎日、テレビは大量の創造性のある作品を消耗します。それゆえ、たいがいの番組はたいそうださいです。その需要に供給がついていくことは不可能であり、同じく高い水準を保つのも不可能です。何百万人が同じ番組を見るときに、全世界が一つの村になってしまいます。そして社会は、結局、読み書きができる以前の社会といったような状況にまで成り下がってしまいます。我々は全く2つの最も原始的な未開の媒体伝達、すなわち絵と言葉だけに依存し始めています。テレビというものはどうしても受け身的な楽しみを促進します。私達はまた、又聞きのニュースに満足し始めています。（東洋大―経済）

第 3 回

《言語の平等性》 過去数十年間、言語学者は世界中のかなりの数の言語を研究してきた。もっとも言語学者が望むほど多くの言語でも、詳細ではなかったのだが。この研究から、他の言語よりすぐれていると言語があるといえる言語学的な根拠はまったくないということがわかった。全ての言語は等しくよいのである。ある言語も他の言語よりもよいと評価することはできない。言語学者は、全ての言語は意志伝達的手段として等しく有効である複雑な体系をもっているということを知った。どの言語もまったく適切な方法でそれを話す人々の意志伝達の必要を満たしており、もしこれらの必要性が変われば、言語もそれに伴って変わるのである。言い換えれば、原始的な言語というものはないのだ。私達の社会ほど科学技術の面では進んでいない社会の言語も、もっと工業化が進んでいる国の言語と言語学的には全く異なっていない。例えば、パプアの孤立した山岳部族によって話される言語は、英語、フランス語および他のヨーロッパの言語とあらゆる面で、同じくらい秩序だっていて複雑でなのである。(駒沢大―経済 62年)《絵を真に理解するのに必要なこと》 絵に真の愛する気持ちをもつ人が最良の収集家になる。彼らはいろいろな絵を見ることによって経験を重ね、関心を抱いている画家の理解を深めていく。そして、色調、題材、技術に対して識別する力をつけていくのである。本や専門家は知識や何らかの洞察力を与えてくれるかもしれないが、最終的な判断を下す際に大事なものは、絵に対する1人1人の独自の反応である。作品の質を認識できるのはきわめて大切なことである。そしてこのために人は、画家の誠実さとそれを絵に移す力量や技術を求めるのである。(駒沢大―経営 62年)

第 4 回

《60年代におけるイギリスの家庭婦人》 60年代までには、働く主婦は特に注目されることなく見過ごされるほどに一般化した特色になっていた。無数の家庭の中でかつては家庭の永遠の中心であった母親は、終日働きに出ており、したがって子供達は緊急の用事で帰宅しても中に入ることができなかった。このことは家事の進行がすっかり変化したことを意味した。夫と妻が2人とも働いてい

るところでは、家事労働は、夜分か週末と一緒にしなければならなかった。圧力がまが初めて利用できるようになったとき、それはあわただしい雰囲気の中では大変価値があった。もっとも、その人気は後には衰えたけれども。それでもなお、食事を整えることは、働く女性にとって負担になる仕事だった。

日常生活における女性の地位のこの変化は、伝統的な一家の団らんの衰退を大いに早めた。どの母親も理解と慰安感を与える静穏な中心人物の役割をたやすく演じることはできなかった。そして彼女は昼間外で働いた後にする夜の家事労働のことを考えて悩んでいた。あたりまえの状況の下で買い物をするのは、働く主婦兼母親の苦難の一つであった。

以前多くの主婦たちが働きに出て行ったのは退屈していたり、義理の両親と同居したりしていたからであったのに対して、60年代では、そうするのに別の理由があった。2倍の収入は新居の代金を支払ったり、欲しいものを購入したりすることの助けとなった。食器洗い機や冷蔵庫のような台所器具は不可欠のものとなり、車は優先する必需品であった。働く主婦の稼ぐお金は、そういう物を手に入れる助けとなり、そしていかなる場合でも、家事にしばられた存在になるだろうという予想は、多くの活動的で教養の高い妻たちを落胆させた。そして彼女たちは家事労働は嫌いだと認めるほど率直であった。（専修大―法 62年）

第5回

《やる気を出させるには、自信を持たせよ》 子供であろうが、夫や使用人であろうが、何かやろうとしていることに対し、無能だとか、才能がないとか、全くやり方が間違っているとか言えば、向上しようという意欲を喪失させることになる。しかし反対に、いつも励ますようにし、簡単にできそうに思わせたり、相手の能力に対する信頼を知らせてやったり、今からまだ伸びる能力があることを強調してやれば、人に負けないように、夜中じゅう朝方まで努力するだろう。

40歳位の友人が、最近婚約したが、いいなずけにダンスのレッスンを受けるように勧められた。その友人は、20年前に踊り方をしていたので、自分でももう一度ダンスを習う必要があると痛感していたのだが、次のような体験を話してくれた。私が雇った最初のダンスの先生は私に恐らく本当の事を言った。あなた

のやり方は、全然だめ。初めから全部やり直して、もう一度始めなさい、と言った。そのことによって私をがっかりさせた。その言葉でやる気を全くなくした。それで私はやめてしまった。

2番目の先生は嘘をついていたのだが、私はそれが好きだった。スタイルは少し古いが、基本はいい。新しいステップはすぐ習得できる、と励ましてくれた。最初の先生は誤りを強調してやる気をなくさせた。次の先生は逆に「生まれつき、リズム感があり、ダンスの才能がある」と反対のことをした。「あなたは生まれつきのダンサーだわ。」常識で考えれば私は四流のダンサーであったし、今からもそうだと思う。しかし、心の底では、先生の言ったことは本当かもしれないと思いたいのだ。

ともかく、もしも彼女があなたは生まれつきリズム感があると言ってくれなかったとしたら、以前より上手にダンサーができるようになったことは確かである。自信を持たせたことは励みになり、また希望が持てた。という話であった。

向上しようという意欲を起こさせるのは、このように相手に自信を持たせることによってできる。人間の性質とは、そのようなものである。（日本大―理工）

第6回

《店の中でクリスマスをおすごした男》 クリスマスイブの夜おそく、ロンドンで、クリスマスの買い物客で込み合う最中に、明らかに自分の落ち度からではなく、有名なチェーンストアに閉じ込められた放浪者についてのおもしろい話が報じられた。確かにその店はぎりぎりにクリスマスの買い物をしようという客で混雑し、従業員はへとへとに疲れ、帰宅したがっていた。店を閉める前に、おそらく適切な安全点検は全くなされて、従業員はぎりぎりにクリスマスプレゼントをかうのに必死になっている買い物客にわずらわされない3日間の休暇を楽しむために帰っていった。

それはそうと、その放浪者は店の中に自分一人しかいないことがわかると、店をできるだけ利用してやろうと決心した。食べ物も飲み物も寝具もキャンプ用具もあったので、彼はそれらを十分利用した。テレビやラジオもあったにちがいない。彼がこれらの設備を利用したかどうかは報じられなかったが、店が再開されたとき、彼は空きびんを多数そばにおいて寝ているところを発見された。実際、

放浪者にはごくありそうなことだが、彼はユーモアと哲人的な気質を持った人であったように思われる。ほかの者は皆クリスマスを楽しんでいたのに、彼も自分がクリスマスを楽しんでではないというもっともな理由が見つけれなかった。彼は大変いそいそとおとなしく警察官に連れ去られて行った。おそらく彼はいつもより楽しいクリスマスを過ごしたのだろう。彼は7日間投獄された。裁判官はチェーンストアに対して放浪者が消費した食べ物や飲み物の補償金を与えるようには裁定しなかった。チェーンストアは新聞やテレビで報道されたそのニュースによって無量で貴重な宣伝効果をすでに獲得した。と考えたからである。おそらく、裁判官もまた楽しいクリスマスを過ごしたのだろう。（東洋大―法）

第7回

《アメリカにおける『平等』と『自由』》 「平等」, 「自由」とは独立宣言の意味から正確には何なのだろうか。実際には表現する理想は実現できるのだろうか。平等と自由は両立するのか, 対立するのか。

独立宣言の以前から、こういった問題は、合衆国の歴史の中心的な役割を演じてきた。 これらの問題に答えようとする試みが知的風土を形成し、血なまぐさい戦争を引き起こし、経済や政治の諸制度に大きな変化を生み出した。この試みは政治的論争を支配し続ける。過去の歴史を持つので合衆国の未来をも形成していくだろう。

共和国の初期10年間に、平等は神の前の平等を、自由は自らの生活を定める自由を意味していた。独立宣言と奴隷制度の矛盾が問題の中心を占めた。その矛盾は南北戦争で解決された。討論はそのとき違った立場に移行した。平等は何人も自らの目標を追求するために自らの能力を使うのを、不当な妨害によって妨げられないという意味の「機会均等」と解釈されるようになった。それは今なおアメリカ市民の大部分に受け入れられている。

神の前の平等も、機会均等も、自らの生活を定める自由とは矛盾しない。それは全く正反対である。平等と自由は同じ基本的価値―各個人自信が目的とみなされるべきだということ―の2つの面にあった。（駒沢大―経済）

第 8 回

《言語とは何か》 言語は音の組み合わせである。その基本的な音は一定の言語の規則に従って結び合わせることができる。例えば、英語は約 45 の異なった音をもっている。だが、音そのものは何の意味も伝えない。ただ言葉を作るために音が結び合わされるときのみに、音は意味をもった単位である。

音と物の結びつきは恣意的である。動物の発する音の模した言葉でさえも、言語が異なれば同じではない。例えば、ニワトリは英語では 'cock-a-doodle-doo' と言い、フランス語では 'cocorico' と言い、ドイツ語では 'kikeriki' と言う。だが一旦この結びつきが作られると、ある特定の言語社会では個人の話し手は、もし自分の言いたいことを他人にわかってもらいたければ、その結びつきを尊重しなければならない。

言語は象徴の組み合わせである。一旦音と音がある結びつきにある特別の意味が与えられると、目の前に存在していない物、例えば、部屋の中にいない犬について話すことができる。言語のもつこのような特性のために、直接の経験を越えて一例えば遠い過去のことについて知ったり、未来のことを考えたりすることができる。

言語は規則の組み合わせである。限られた数の規則、つまり言語の「文法」の助けを借りて数限りない文章を作ることができる。このようにして話し手は誰でも言語を創造的に使うことができる。

言語には適応性がある。どんな社会の言語でも非常に複雑であることがわかっているので、話し手は平常経験するどんな経験に対しても言葉を適応させることができる。経験の領域が変われば言語も変わる。現在使われているすべての言語の語いはその話し手の必要を満たすために拡大することができる。ラテン語のような言葉を用いても、話し手は例えば、もしタイプライターを示されたら、そのタイプライターを完全に言い表すことができ、もしタイプを打つことが古代ローマの日常生活の一部となっていたらそれにあてはまる新しい言葉を作ることもできたことだろう。（専修大－経営－経営）

第9回

10年以上も結婚してきた日本人の主婦の中には私達の生活は幸せではないと
しみじみ思うようになる人がいます。主婦たちはすでに家族をめぐって自分の生
活が決まってしまっています。主婦たちが行ってきた決定のほとんどが、家事の
ことにかかわったり、子供を育てたり教育をしたりすることとかにかわった問題
でありました。よくよく考えてみると、女は一旦結婚をしてしまうと、もはや自
分の人生について影響を与えるような決定を下すことを既に放棄してしまったこ
とになります。

ますます多くの日本の女性たちは不幸な結婚は結果として離婚につながるのは
必然的であると考えられる傾向があります。実際には、1984年に厚生省で発行さ
れた統計によれば、10年以上結婚してきた夫婦の間の離婚率は10年という期
間に渡って劇的に増加してきました。1982年には、離婚というものはその年
記録したところの離婚の全数字の41%にのぼりました。

離婚をじっくり考えつつある多くの日本人の奥さん方を最終決定するまでに妨
げることは自分の生活が保障されることを亭主に依存して生きていくです。奥さ
んたちは自分自身にたずねます。「万一、私達の結婚を壊すようなことが起こり、
あるいは万一夫が死にしたら、どうやって私はやって行けるのかしら。」

私の妻も同じような質問をしました。（日本大）

